

ムルク・ラージ・アーナンドの三部作について その1

—ナショナリズムへの軌跡—

小西真弓

ムルク・ラージ・アーナンド (Mulk Raj Anand, 1905-2004年) は、我が国においては『不可触民バクハの一日』(*Untouchable*, 1933年) や『苦力』(*Coolie*, 1936年) の作者、あるいはインド芸術の批評家として知られる多才なインド英語作家である。本稿で紹介する三部作、『村』(*The Village*, 1939年)、『黒い海を渡って』(*Across the Black Waters*, 1940年)、『鎌と剣』(*The Sword and the Sickle*, 1942年) は、第一次世界大戦前後のインドとヨーロッパ戦線を舞台にした一連の物語である。それぞれの作品には、作者自身の自伝的要素が多分に反映され、実在の人物をモデルにした多くのインド人やイギリス人が登場している。三つの作品は、それぞれ独立したテーマをもつ小説として評価することもできるが、10余年にわたる主人公ラーの精神的発展の軌跡には、インドの激動期にイギリス支配の恩恵と弊害を受けながら成長したアーナンドの思想の変化が窺い知れる。ラーの観点は東西の世界をまたがる新奇なものであるが、その思想は「社会主義」、「自由主義」あるいは「革新的」といったような言葉では明確に捉え難い。作品全体から感じられるインドの宗教思想やナショナリズムに関する「揺れ」や「矛盾」は、作者の思想の限界というよりもむしろインドの独立闘争期の混迷した時代背景に帰せられるべきである。西洋文化に憧れてインドの因習からの脱却を目指した主人公が、最終的にナショナリズムへ傾いた経緯を語った三部作は、圧倒的な力で追ったイギリス文明を触媒として、インドを再生しようとした人々の苦悩やジレンマを物語った作品として評価されるべきである。

キーワード：ムルク・ラージ・アーナンドの三部作
パンジャブの農村破壊とナショナリズム
第一次大戦に巻き込まれたセポイ

*テキストには、Mulk Raj Anand, *The Village* (London: Johnathan Caper, 1939) を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。

序

1930年から60年代にかけて出版されたムルク・ラージ・アーナンドの数多くの作品には、インドの宗教対立やカースト問題をはじめとして、帝国主義戦争、ナショナリズム、コミユナリズム等、様々な社会問題が提起されている。多くの登場人物が作者自身や友人、親族を連想させたり、歴史的な事件に巻き込まれて精神的な成長を遂げるために、アーナンドの物語はしばしば「教養小説」あるいは「歴史小説」として評価される。彼の写実的な作品は、

ラビンドラナート・タゴールの小説と比較すれば、哲学・宗教的な深みや芸術性に欠けるとも言えようが、各々の場面は臨場感あふれる筆致で描かれ、登場人物の喜怒哀楽に作者の共感がこめられている故に、読者をひきつけてやまない。

アーナンドがあえて宗教やカーストの問題を取り上げた要因は、持ち前の社会に対する鋭い洞察力や正義感、反骨精神に求められる。とはいえ、それらは多分に彼の生育環境によって培われたものであり、彼の生い立ちを知ることはその思想を知る上で不可欠であるように思われる。本稿では、彼の伝記を紹介しながら20世紀前半の英領インドの宗教や社会問題が反映されている三部作の最初の小説『村』を解読してみたい。

I

ムルク・ラージ・アーナンドは、1905年に英領インド北西辺境州（現パキスタン）の都市ペシャワールに生まれた。¹⁾ 彼の父親ラル・チャンド (Lal Chand) は、クシャトリアに属する金物細工師カースト (Thathiars) の出身であったが、祖父や父親がアーガー・ハーン三世 (Aga Kha III, 1877～1957年) に所有地を寄付して相当な財産を失ったため、先祖代々の仕事に見切りをつけ、ミッションスクールで習い覚えた英語力を頼りに、軍属の書記 (babu) の仕事に就いていた。当時、イギリス人将校に仕えることは、「毛唐の奴隷」という親族の言葉が示唆するように、²⁾ 高カーストの誇り高いインド人にとって必ずしも自慢できることではなかった。アーナンドの母親さえ、第二次シーク戦争で祖父が戦死したり、実家の土地がイギリス軍に取り上げられた経緯もあり、夫の仕事には不満を抱いていた。とはいえ、イギリス人将校から英語力ばかりではなく、ホッケーの審判役に任命されるほどの人望を得たラル・チャンドは、「セポイ」として最前線に駆り出されることもなく、月11ルピーの給料で息子4人に高等教育を授けられる身分となり、故郷のアムリツァルに帰れば「出世頭」として一目置かれる存在となった。

ミッションスクール出のアーリア・サマージストゆえか、ラル・チャンドはつましい暮らしを家族に強要しても、子供の教育に投資することを惜しまなかった。4人の息子たちばかりではなく、無学な妻にさえ彼はヒンドゥー語の読み書きを教えたり、軍人のための語学教師が一家に出入りして彼女やアーナンドがサンスクリット語を学ぶことも許した。そんな父親から学問で身を立てることを期待されたアーナンドは、ミッション系の小学校に通う時から英語の学

1) アーナンドの伝記的事項については、『集英社世界文学大事典』（集英社、2002年）I, 69-70; 『20世紀英語文学辞典』（研究社、2005年）36-37; Krishna Nandan Sinha, *Mulk Raj Anand* (New York: Twayne, 1972) 14-26; Amrik Singh, *Mulk Raj Anand: Role and Achievement* (New Delhi: National Book Trust, 2008) 1-39; Mulk Raj Anand, *Pilpali Sahab: A Story of Childhood under the Raj* <Autobiography; part 1>; *Seven Summers: A Memoir; Morning Face; Confessions of a Lover; The Bubble*を参照した。

2) アーナンドの母方の祖父ニハール・シンと叔父シャーム・シン夫妻の言葉, Anand, *Pilpali Sahab*, 192参照。(アーナンドの母親が結婚した当時、父親はまだ学生で彼が英印軍に入隊することは誰にも予測できなかった。母方の祖母は長男の父親が家業の金物細工業を継がないことに怒り、叔父のパー tapp・シン <Pertap Singh> に財産を相続させたという。Anand, *Morning Face*, 432参照。)

習に励み、ハイスクールに入学後は英文学に親しむようになる。³⁾ 英語を流暢に話しイギリス人の衣服を纏って通学した彼は、しばしば国粋主義的な教師や級友のいじめに悩まされたが、イギリスの将校の文明的な生活を垣間見つつ成長したために、彼らの流儀を習い覚えて土民を支配することを夢見た。そのために、スパルタ式のハイスクール教育やレベルの低い教師の授業にも耐え忍ぶことができた。しかし、ジェルムの官立ハイスクール時代にアムリツアルのジャリアーン・ワーラーバーク事件(1919年)に巻き込まれて、当局から体刑を蒙ったことをきっかけに、⁴⁾ 彼はイギリスのインド支配の暴虐性を悟るようになる。なるほど物心ついて以来、信仰やカースト、民族の異なるインド人たちの間に存在する軋轢にやるせなさを感じていたアーナンドには、父親の「インド人は常にお互いを憎み合ってきた… イギリス支配がなければ同胞は殺し合うだろう」⁵⁾ という主張もあながち詭弁ではないように思われた。しかし、丸腰の民衆を射殺したり戒厳令を守らなかっただけの住民を投獄したり鞭打つ当局の弾圧に遭遇して、彼はイギリス支配の不条理を非難する母親の気持ちも汲むようになる。

アーナンドが巻き込まれたジャリアーン・ワーラーバーク事件は、実際にイギリスの弾圧に憤った地元の民衆の間にナショナリズムの気運を高め、若者をテロ行為に駆り立てた契機と言われる。パンジャブ州内では、官立のハイスクールやカレッジの内部にも、ガンディーのサティヤグラハ運動を支持する教師や生徒が目立ち始め、アーナンドが彼らの感化を受けることは避けがたかった。ナショナリストと付き合うようになった彼は、ガンディーの教えこそが様々な集団に属するインド人を一つにまとめ、イギリス支配や資本家、封建領主の搾取から民衆を救うものであると感じるようになる。カルーサ・カレッジに入学後、彼はテロリストまがいの学友とも付き合うようになり、学内で開催されたアニー・ペザント女史の講演会をめぐるサティヤグラハ運動に参加して官憲から殴打され、獄中生活を経験する。⁶⁾ 無論、彼にはそのような活動が父親の立場を危うくすることは認識できた。家庭内の反逆分子に激怒した父親が、自分をかばう母親にも暴力をふるうことは耐え難くもあった。悶々としつつも、何とか卒業試験には合格してパンジャブ大学から学位を授与されるが、彼は自分の信念や衝動に逆らうことはできず、父親の期待通り政府の役人になる道を選べなかった。詩を書いたり、社会問題を解決するために文筆の力で世論を糾合することが彼の天職のように思われた。家に居づらくなった彼は恋愛問題のもつれから逃れる必要もあってイギリス留学を思い立ち、⁷⁾ 母親や恩師

3) アーナンドは、父親の転勤のために三つのハイスクール(アムリツアルの私立パンディット・バイジ・ナス<Pandit Baiji Nath>ハイスクール、ルディアーナの官立ハイスクール、ジェルムの官立ハイスクール)へ通学した。彼のハイスクール時代の回想は *Morning Face* 参照。

4) 戒厳令が発令された折に興味本位で町をうろついていた彼は、当時15歳の少年であったが、官憲に捕らえられ収監された後に、鞭打ちの刑を被った。Anand, *Morning Face*, 449-58参照。

5) Anand, *Confessions of a Lover*, 170.

6) これらの件に関しては、*Ibid.*, 156-69; 246-74参照。

7) アーナンドは、カレッジのイスラム教徒の学友ヌール(Noor)の義妹、ヤスミン(Yasmin)と相思相愛の仲になったが、彼女は二人の仲を懸念した父親によって従弟のイスラム男性に嫁がされてしまう。しかし二人の恋愛感情は消えることなく、ヤスミンは生まれたばかりの赤ん坊を連れてアーナンドと駆け落ちすることを計画する。彼女はそれを知って怒った夫に殺害されたと言われるが、殺人事件は闇に葬られる。アーナンドは、ヌールの友情を失うことはなかったが、父方のヒन्दゥー教徒の親族から破門された。一連の経緯は、*Confessions of a Lover*のモチーフとなっている。

の援助で1925年にロンドンへ旅立つ。

ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジに入学したアーナンドは、カントの研究で有名なD.G.ヒックス (G. Dawes Hicks) 教授の指導の下に哲学を専攻して、学業生活を始める。英語は堪能であったものの、インドの地方都市で生まれ育った彼にとって、西洋の思想を理解するのは容易でなかった。留学生活は経済的にもあまり恵まれなかった。それでも、ヒックス教授やウェールズで出会ったアイルランド女性の援助、E.M.フォスターをはじめとするブルームズベリー・グループの作家たちの交際に支えられ、勉学や著作活動に励んだ彼は1929年に哲学博士号を取得する。その間、イギリスの労働者のジェネストを目撃してヨーロッパ社会に潜在する政治・経済的搾取を認識し、マルクスの著作を読んだり、クリストファー・コードウェル (Christopher Caudwell, 1907-37年) 等の左翼作家との交流を始め、彼らの社会主義・共産主義的な思想に傾倒していく。またその一方で、スリランカの芸術家クマーラスワミー (Ananda Kentish Coomaraswamy, 1877~1947年) からインスピレーションを受けた彼は、ペルシアやインドの芸術に関する作品を執筆したり、T.S.エリオットの援助で文芸評論誌『クライテリオン』(Criterion) に寄稿して名を知られ、作家として生きるめどを立てた。しかし、彼は祖国や家族のことが忘れられず、ロンドンにあってインドのナショナリズム運動を支持し、命がけて帰国してJ.ネルーに面会を求めたりもした。そんな折、ガンディーの週刊誌『ハリジャン』との遭遇は、不可触民の窮状の物語化に彼を取り組ませるきっかけとなった。ガンディー指導の下に書き直された彼の『不可触民』は⁸⁾ 1935年に発表され、期待どおり世界中の世論を喚起しガンディーの思いをより広く伝える役目を果たす。アーナンドは、このヒット作に自信を得て『苦力』(Coolie, 1936年) と『二枚の葉と一つの蕾』(Two Leaves and a Bud, 1937年) を執筆して、農村を追われて都会や茶園の労働者となったインド人が資本家に搾取されて悲惨な状況にあることを語り、間接的に植民地の人種差別的な政治・経済政策を批判した。これらの作品は、イギリス作家のアングロ・インド小説ではテーマにされなかったインド貧民の劣悪な生活環境——路上生活や悪臭のたちこめる掘っ立て小屋暮らし——ばかりではなく、イギリスの資本家の悪徳が如実に描かれているので、様々な反響を呼び起こした。なかでも、インド人労働者に対する茶園主とその取り巻きの非道がテーマになっている『二枚の葉と一つの蕾』は、アッサム地方のイギリス人茶園主から酷評されて英領インドで禁書扱いにされた。⁹⁾ しかし、その内容の信憑性についてアーナンドは一步も譲らなかった。イギリス本国にあって、ガンディーの不服従運動に身を投ずることはできなくとも、文筆の力でイギリス支配者の搾取を批判しインドの独立に貢献することが彼の使命であった。そのためにまず必要なことは、被支配民族の視点から見た英領インドの実情を周知させることであり、この小説に続く三部作では、インドの農村の衰退が写實的に描かれているばかりではなく、主人公ラルーの精神的発展を通し

8) 1928年にアーナンドは一時帰国してネルーに面会している。1932年に帰国したのは、ガンディーに『不可触民』の原稿の批評を求めるためでもあった。この作品はガンディーのアドバイスに従ってかなり修正され、序文を寄せたE.M.フォスターの援助で出版された。Singh, *op.cit.*, 12-15参照。

9) このエピソードについては、C.J. George, *Mulk Raj Anand: His Art and Concerns*, (New Delhi: Atlantic, 2000) 70-71参照。

て、それが最終的に農民をナショナリズム運動へ駆り立てた要因であることが物語られている。

II

植民地経営を批判するプロパガンダ的小説『二枚の葉と一つの蕾』に比較すると、『村』はパンジャブの農村の没落を背景にしつつも、横柄なイギリス支配者や農民一揆が描かれていないためか、それがナショナリズムへ繋がる物語には感じられない。しかし、作者の生い立ちや作品の時代背景を考慮しつつ続編の『黒い海を渡って』と『剣と鎌』を合わせて読むと、この小説も間接的にイギリスの帝国主義を批判する意図をもって描かれたことが理解できる。アーナンドが『村』においてパンジャブの農村問題を提起したのは、母親の実家があるダスカ村に郷愁の念を抱き、その没落を遺憾に思ったためであろう。¹⁰⁾ 幼い頃に訪れた当地の「空の青さ」と麦穂の撓む大地の黄色のコントラストの美しさは、彼の心に刻まれ「常に思いだされた」という。¹¹⁾ 幼い頃からパンジャブの農村に伝わるおとぎ話や英雄伝、ダリップ・シン王子 (Duleep Singh 1838～1893年) の悲劇を祖父や母親から聞かされた彼は、自らの体内にイギリス軍と戦ったシーク戦士の血が流れていることを自覚し、敗戦によって貧民となった母親の親族たちに同情の念を禁じ得なかったに違いない。そのため、物語の主人公ラーの年老いた父ニハール・シン (Nihal Singh) には、信仰を重んじる清廉実直なシーク教徒のイメージが投影されていると思われる。

ニハール・シンの一族が衰退した経緯は、アーナンドの母方の実家と同様、シーク戦争に敗れたことに遡る。彼が述懐するように、テジ・シン (Tej Singh) の裏切りがなかったら、¹²⁾ シーク王国は藩王国として名目だけでも自治を保ち、彼の一族もイギリス支配者の同盟とも言える大地主や役人に悩まされることなく安泰であったかもしれない。そう思えば「100歳まで生き延びる薬はないか。もう少し生きることさえできたら、敵どもを追い詰めてやれるのに」(303) と病の床でつぶやくニハールの心中は、同じような運命を辿った読者にとっては察して余りあるものだったと思われる。戦争の思い出を語りつつ、土地を奪い返す戦いをラーに託す彼の言葉は、滅びゆく老兵のうわ言のようでもあるが、歴史の重みを感じさせるものである：

わしは戦争の嵐の中を勇敢に振る舞った、戦いの最中であつたと思う。そして銃で撃たれて足に痛みを感じお前のお祖母さんの従弟カラック・シンの傍で気を失って倒れた。気がついたら、赤ヒゲをはやしお前のお爺さんと全く同じ様に、にっこりと微笑むイギリスの医者の方のテントにいた...

10) アーナンドの母イシュワル・コウル (Ishwar Kaur) の実家は、シアルコット (Sialkot) の近くのダスカ (Daska) 村にある。『村』に登場するニハール・シンのモデルは同名の母方の祖父である。ちなみに、アーナンドの母親の実家の親族は、耕作地と屋敷のすべてをシーク戦争の敗戦時に取り上げられて以来、銅細工と購入した1エーカーの土地の耕作によって細々と暮らしてきたと言われる。Pitpali Sahab, 184-195参照。

11) Anand, *Seven Summers*, 187参照。

12) テジ・シンの裏切りについては、*From Sepoy to Subedar: Being the Life and Adventures of Subedar Sita Ram, a Native Officer of the Bengal Army Written and Related by Himself*, ed. by James Lunt (London: Routledge, 1873) 140, 143にも言及がある。

あいつらイギリス人はずる賢い。その医者はおわしの肩を叩いて言った。「真実は神なり (Sat Sri Akal)」と、どこでその医者はシーク教徒の内輪の呼びかけの言葉を習い覚えたのか、奴らは、わしよりシーク教徒のことをよく知っていた。

医者は親切だったから、わしは迫られてイギリス政権に忠誠を誓うことを受け合い、奴らを許してやった。ただあいつら毛唐どもがパテンでパンジャブを取り上げたのがどうしても許せん。

テジ・シンを領主にすえおって！ ああ、その邪悪さ考えてみてくれ！ わしらは相続した25エーカーのうち10エーカーの土地をイギリス支配者の暴力によって失ってしまった…

それからあの裏切り者テジ・シンの息子ハーバン・シンが厚かましくも、お前のお爺さんが署名したとかいう偽の借用証書を作り上げて、抵当にされた5エーカーを取り上げた… 何でそんなパテンがまかり通ったのか！… (16-17)

イギリス支配者によるパンジャブ併合の妥当性はさておき、シアルコットが州内で最も肥沃な地であるなら、ニハールに残された10エーカー（約4町歩）の耕作地は、3人の娘を嫁がせ、妻と長男夫婦、次男、三男のララーを養うのにさほど不足はないように思われる。¹³⁾ にもかかわらず、彼が生活費や納税のための資金が足りずヒンドゥーの金貸しラム・チャンド (Lam Chand) から200ルピーを借り入れなくてはならなかった理由については、パンジャブの農業問題を考察した行政官 M.L.ダーリングが指摘するように、一家の威信や宗教的慣習への拘り——特に婚礼への莫大な出費——が貧困化の一因になっているとも考えられる。しかし、政府当局はインド人の宗教にまつわる慣習には干渉しないことが鉄則であり、その問題を解決することはできなかった。しからば、蓄財のために収益の高い商品作物を作るように農民に勧めても、それは宗教的慣習に抵触したりカーストの墮落と見なされるのでなかなか受け入れられなかった。¹⁴⁾ そのような状況は物語の中で、ニハールや彼の親族ハーナム・シン (Harnam Singh) が、果物を栽培したり搾油で収益を上げているイスラム教徒の隣人ファズル (Fazul) を見習おうとしないことから窺い知れる。また害虫や干ばつなどの被害を受けやすい風土のために、20世紀初頭のパンジャブに10エーカーの土地をもつ農民は、同面積を所有した日本の自作農ほど恵まれた生活を送れなかったと思われる。しかしそれにしても、粗末な衣服を纏い、酒もたばこも買わず、電気・水道・ガスの設備もない家に住んで10エーカーの土地を耕すニハール家の人々が、200ルピーの借金を余儀なくされたとしたら、それは政府当局が「生かさず殺さず」以上の重税を農民に課したからとも言えよう。¹⁵⁾

13) パンジャブの行政官 M.L.ダーリングによれば、当時のシアルコットの農家は平均4.5～7エーカーの耕作地を所有していたという。M.L. Darling, *The Punjab Peasant in Prosperity and Debt* (London: H. Milford, 1925) 41 参照。

14) 例えば、シーク教徒は禁煙を掟とするので利益が多くてもタバコ栽培は躊躇した。また穀物栽培から野菜作りに転換することは「墮落」と見なされたという。このようなカーストと農業の問題については、H. Calvert, *The Wealth and Welfare of the Punjab: Being Some Studies in the Punjab Rural Economics*, 2nd (revised) ed. (London: H. Milford, 1935) 6, 181 参照。

15) パンジャブの農業を研究したインド高等文官 H.カルバートは、当地の小農の納税額は収穫量の5～8%以下で、約16%を収める日本の農民より恵まれた暮らしができたと言う。しかし、イギリスの産業労働調査所のジョアン・ポーチャンは、インドの農民の貧窮化の原因は収穫高の3分の1以上を要求する税政やお粗末な農業補助にあると指摘している。H. Calvert, *The Wealth and Welfare of the Punjab: Being Some Studies in Punjab Rural Economics* (Lahore: Civil and Military Gazette, 1922) 76; Joan Beauchamp, *British Imperialism in India: Prepared for the Labour Research Department* (London: Martin Lawrence, 1934) 83-96 参照。

ニハールの住むナンドプル (Nandpur, <架空の地>) の小農たちが作物の種の買い付けにラム・チャンドから借金を余儀なくされたのは、冠婚葬祭の乱費のためというよりは、政府が増収のために故意に作物価格を下落させたり、ありとあらゆる理由をつけて農民への税負担をつり上げていたことにある。ニハールが指摘するように、村の灌漑設備も発電所も、村民に重税を課して賄われたものであった。農民は電気製品を買うこともできず、森林から薪を採るには税金がかかるために、相変わらず牛糞を燃料に使う有様であった。確かにイギリスの行政官が誇るように灌漑設備によって農業の収益は上がったが、それだけ余分に地税や年貢が要求されたのも事実である。地税をはじめとするあらゆる税金が払えなければ、私有地は容赦なく取り上げられた。仕方なく小農は納税や作物の種の買い付け等のために30～60%の利息を要求する高利貸しに借金をするが、¹⁶⁾ 返済できずに担保にした耕作地を手放す羽目に陥った。農民が干ばつや疫病に苦しもうと、政府は減税に応じなかった。そのため、ハーナム・シンもラル・チャンドから借入れをしたのが災いして、担保にした全私有地6エーカーを失ってしまう。ラルーの友、グギー (Gughi) の父親ジャンドゥー (Jhandu) が粗末な旅籠屋を経営しつつ、牛車の御者として生計を立てるようになったのも、借金まみれになって小作地を「取り上げられた」故である。それでも彼らは何とか村に留まることができたが、村での生活ができなくなった農民の中には、シャーコット (Sherkot) の町でボロを纏い「泥と汚れ」にまみれた7人部屋暮らしの労働者に転落した者もあった。そのような「ほとんど村全体が破産していくような状況」に対して、シーク戦士の末裔たちが憤るのは当然のことであった。彼らは、『苦力』や『二枚の葉に一つの蕾』の主人公たちとは異なり、自分たちの土地を取り上げる金貸しや大地主の背後にいる黒幕が政府当局であることを察知していた。それは発電所のパート労働者になったハーナム・シンの次のような怒りの声によって明らかにされている：

政府当局は穀物価格をいかに規制するか知るべきだ。そして市場での穀物の下落に対して小農に補償を与えるべきだ。どうやって俺たちのような無知な農夫に、市場の状況を予見しろって言うんだ。俺たちに多すぎず、少なすぎないように作物を生産する計画ができるわけがない。なのに政府当局は、何もしてくれない。地代を集める税吏を送りつけ、どのくらいの値段で穀物が引き取られるのか気にかけずに、税金を取り上げる。しかも俺がそれについて税吏に文句をつけても、奴は「逆境は、お前たちに金の価値をもっと良くわきまえさせる」と言うだけだ。(267)

多額の負債をかかえるパンジャブの小農民の苦境は、ダーリングのようなイギリスの支配者たちに認識されていた事実であった。にもかかわらず、それが放置されていたのは、軍事費をインド人から搾り取る税金で賄う必要があったためである。また近代文明の進展による農業の衰退は必然的であると考えられる傾向もあった。そのために農業問題を解決しようとする役人の間には、小農の離農や移民を歓迎する者もいた。機械を導入して収穫、即ち税収を上げるためには、小農から農地を取り上げて大地主のもとへ集積する方が効率がよかった。つまるところ、彼らには本気で先祖伝来の農地に愛着をもつハーナム・シンのような農

16) Beauchamp, *op cit.*, 93 参照。

民を救済する気がなかったのではないか。しからば当時のインドの人口の66%ほどを占めた農民の多くがハーナム・シンが抱くような反英感情に目覚めて、ガンディーの唱えるナショナリズムに共鳴するようになったのも当然であろう。

しかし、「裏切り者テジ・シン」あるいは「無知な農夫」という言葉から想像できるように、ナンドプルの小農の没落の原因は、帝国主義がもたらした経済制度や法律のみならず、彼ら自身の社会に蔓延るコミュニズムや、反啓蒙的な宗教的慣習にもある。イギリス式教育を受け、ヨーロッパ各地を見聞する機会に恵まれたアーナンドは、ナショナリストのように帝国主義に対抗するために、インドの農村を幸福な農民と職人からなる自給自足の平和な共同体としてロマンス化することはなかった。彼が賞賛したのは、自然に恵まれたパンジャブの農村の遠景であり、農民の生活様式そのものではない。なるほど彼はマルクスと同様に、¹⁷⁾「帝国主義が古くからある村の生活の基盤を破壊し、機械的に上から一つの構造を押し付けた。それが自給自足の封建的な村の総ての土台を弱体化し、代わりに別の封建的な制度を置いた」¹⁸⁾と述べているが、ガンディーとは異なり、インドの農村に近代文明を導入することを否定してはいない。イギリスの制度や文物が既に導入されていた時代に、農民が文盲状態のまま糸紡ぎ車を紡いで生計をたてるのは無理であることは明らかであった。たとえ購買力が低くても、農民の労働を軽減する近代的な農機具やミシン、電気製品は村の生活を改善する道具として歓迎するべきものであるように思われた。大量生産品を村に持ち込んで鍛冶屋や陶工を廃業に追い込んだ鉄道も、敬遠されるべきものではなく、農業の発展に役立つ道具として使うべきだというのが彼の考え方であった。またイギリス人に支配される同胞の境遇を「宿業」とか「前世の因縁」といって諦めるのもアーナンドの性分には合わなかった。彼が祖国の農民に求めたものは、西洋文明と折り合いをつけて自らを啓蒙し、村を再生させることであった。そのような彼の願望は、村の因習に挑戦する「反逆児」ララーの性格付けに投影されている。

III

ナンドプルに生まれ育ったララー・シンはパンジャブの自然の風景を愛し、その大地を家族と共にせつせと耕す17歳の少年である。ニハールは、シーク教徒の家長らしく教育を重んじ、勉学の得意であった三男の彼にシャーコットのチャーチ・ミッション・ハイスクールで中等教育を受けさせた。知の水平線を上げた彼は、漠然と西洋文明にあこがれ、裸足よりもアメリカの農夫が用いる長くつをはく農作業に憧れるようになる。また泥や家畜の糞尿にまみれた村の農家にも嫌悪感を覚え、「火事になって、このみずぼらしい掘っ立て小屋が丸焼けになればいいのに！ 発電所の近くの機械工の家々のようにレンガ造りの建物の町並みを見たい」(53)と密かに願ったりもする。しかし、彼にとって村の子どもたちは一不可触民もイスラムの貧しい機織りの子ども、ニハールの敵である金貸しや大地主の子どもたちでさ

17) マルクスのイギリスのインド支配観については、カール・マルクス著 大内兵衛 [他] 訳「イギリスのインド支配」、『マルクス・エンゲルス全集』第9巻、(大月書店、1962) 121-27参照。

18) Mulk Raj Anand, *Letters on India*, (London: George Routledge & Sons, 1942) 38.

えーすべて遊び仲間であった。親たちは貧富の差、カーストや信仰の違いを意識しても、彼はミッション・ハイスクールで教育を受けたためか、それらに拘ることはなかった。

ラーズには父親ニハールがイギリス支配を憎む気持ちはおぼろげながらも理解できたが、西洋の近代文明をあくまで拒否するのは時代遅れで、本人にも村全体のためにもならないように思われた。次のラーズとニハールの鉄道に関する見解の相違は、古い生活様式を好む父親と西洋教育を受けた息子のギャップを浮き彫りにしている：

「… お父さん、あなたが何と言おうと、この穀物袋を背負ってマナバードやシャーコットの町まで行きたくはないでしょう。牛車の御者は、タバコを吸ったり牛に餌をやるために20回も荷車を止めますよ。時々、奴らは酔っぱらってしまうので、町へ着くのに一泊二日もかかることがありますよ。でも貨物車なら一時間で何でも町へ送れますよ。」

「お前は馬鹿か！」ニハール・シンは憤って鼻息を荒げて言った。「お前にはどこへ荷物を送ろうと、そこにいるインド人の係員に貨物車の使用料や賄賂を渡さねばならぬのが想像できんのだ。税関であの畜生どもの目をくぐりぬけるのがどんなに難しいのかもわかったらん。牛車なら百もある裏技を使って町へ運び込めるんだぞ…」 (10-11)

ニハールのような原始的な農作業への拘りは、ダーリングが批判するようなパンジャブの農民の創意工夫や先見の明の無さを象徴するものであろう。しかし、この親子の会話で問題にされるべきは農作物の運搬方法ではなく、税関でまかり通る「裏技」や「賄賂」が横行するような状況が放置されていることであろう。ニハールが憤るように、パンジャブの町では「弁護士が盗人になり、税関を通る前に警察が牛車から賄賂を欲しがる」(37)のことが実情であった。弁護士のバマルカンド (Bamulkand) が、町や村に複数の家を構えることができたのも、被告のハーバン・シンが判事と知り合いで勝算がないことを承知の上で、ニハールから10年に渡って訴訟の費用を巻き上げた「盗人」のような仕事ぶりからである。村の税吏 (Patwari) のパダム・チャンド (Padam Chand) にしても、公務に関わることを盾にジャンドゥーの牛車に無賃乗車をして憚らなかつた。そのようなインドの役人やその同盟者である大地主、金貸し、弁護士の不正を一掃したいアーナンドの気持ちは、無賃乗車を断ってパダム・チャンドから蹴飛ばされたジャンドゥーへの¹⁹⁾「立ち上がれ、自分を守れ、おお勇者よ」(172)というラーズの呼びかけに代弁されている。税吏から殴られそうになったラーズをかばうために「もしその少年に手を出したらお前を生で食べてやるぞ」(173)というジャンドゥーの脅しは、虐げられたインド人の怒りが爆発した表れであるが、その矛先がイギリス支配者ではなく、彼らの手下として働く「同胞」に向けられていることは注目に値する。パダム・チャンドへ投げかけたジャンドゥーの言葉には、イギリス支配に組するインド人がインドの民主化や経済的発展を妨げ、体制崩壊を招くという作者の見解が投影されている：

「お前たちは皆同じだ、政府の役人どもめ！」と歩きながらジャンドゥーは言った。「文官であろうと軍人だろうが、警官までも、制服や洋風ズボン身を身につければ、すぐに俺たちがお前たちに何でもただでやると思ってるんだ。お前たちは貧乏人を脅したり、だましたり、威張り散らしたりす

19) ジャンドゥーが特にヒンドゥーの役人に虐待される理由は、彼がイスラム教徒に改宗した不可触民だったからでもある。Village, 169, 171 参照。

る… だが同胞よ、いつかどこかで何かが起こるぞ。そうになったらお前さんも古巣へ帰ることになるんだ、審判の日が近づいているんだからな。まあしばらくは自分の仕事に精を出して、政府のためにできるだけ多く金を集めたほうがいだろう。(174)

ラルーが横暴なインド人税吏に立ち向かうのは、ジャンドゥーと同様、内に秘めた反骨精神を刺激された故であるが、その勇気やフェアプレーの精神は、ミッション・スクールの西洋式教育やボーイスカウト活動によって培われたものでもある。確かに彼には、ハーナム・シンが抱くような反政府感情や、「何かが起こる」というジャンドゥーの先見の明はなかったが、賄賂や脅しが役人の間でまかり通る不条理を認識できた。また読み書きや利息の計算が得意だったので、ニハールがラム・チャンドから借金することの危険性や愚かさを察知することもできた。学校では西洋の民主主義や博愛の精神を教えられるのに、村では金儲けの得意なインド人や大地主ばかりが政府から保護されて、全うに働く小農や貧乏な労働者が搾取される現実にも矛盾を感じていた。自由・平等の精神は、政府に仕える役人にも村人の心にも浸透していなかった。それは彼らがキリスト教や西洋教育と無縁であるならば、もっともな話とも言えよう。それはさておき、ラルーにとって村のシーク教徒がカースト思想を捨てきれなかったり、²⁰⁾ 礼拝や結婚式などの宗教的儀礼に多額の費用をかける現実はより受け入れ難かった。それは本来のシーク教徒の信仰にそぐわないものだった。²¹⁾ 「人はすべて平等」を標榜するはずのシーク教徒が多く集まる村の一角には「不可触民」の集落があり、そこは長老たちから「地下通路で地獄に繋がった閻魔大王国の一部分」(125)と厭われるほど劣悪な環境のままにおかれていた。ラルーは、そこに住むブパ (Bhupa) と魚釣りを一緒に楽しむ間柄であったが、周辺の悪臭には耐え難く、そんな集落を「動物が住むのにふさわしい場所だ」(197)と批判するイギリス人政務官代理 (Deputy Commissioner) ハーキュレス・ロング (Hercules Long) の言葉に、恥ずかしい思いがしてプライドも傷つけられる。しかし、ロングの偽らざる感想は「みすばらしい掘っ立て小屋が丸焼けになればいいのに！」という密かな願望を正当化するようにも感じられた。そのため彼は農村の生活改善をボーイスカウト活動に託したロングの期待に応えようと、そのリーダー役を引き受ける。

IV

ロングがナンドプルにボーイスカウトを結成したのは、規律を重んじる西洋の生活様式や思想を村の少年たちの間に広めて、村全体の啓蒙化を図ろうとした故である。彼は進取の気取りに欠ける村の長老たちに村の改善に取り組ませることを諦め、ラルーのような西洋教育を受け入れる若者たちに期待した。長老たちは自分たちを軽蔑するロングを苦々しく思ったが、ボーイスカウトの理念は友愛を重んじる本来のシーク精神と齟齬をきたすものではな

20) シーク社会の不可触民、カースト問題については長谷安朗著「シク社会における不可触民」、佐藤正哲、山崎元一編『歴史・思想・構造』<叢書 カースト制度と被差別民 第一巻> (明石書店, 1994年) 307-50頁参照。

21) シーク教徒の元祖 グル・ナーナクは上辺だけの儀礼や儀式を捨て去ることを説いたという。N.G. コウル・シング著、高橋堯英訳『シク教』(青土社, 1994年) 41頁参照。

く、彼の提案に反対できなかつた。とはいえ、ラーが低カーストや不可触民を含むボーイスカウト隊員の少年たちを引き連れて村を闊歩するのは、村人の因習や無知につけこんで利益を上げるハーバン・シンやラム・チャンド、マハント²²⁾のナンドギル (Nandgir) にとって、はなはだ迷惑な話であった。西洋式教育を受けたラーはともかく、ジャンドウーの息子グギ (Gughi) や機織りの息子グラム (Ghulam)、牛飼いゴバル (Gopal) までが「洋服」を着てボーイスカウト活動への支援を要求するようになれば、有力者の自分たちの「威厳」が損なわれるように思われた。外面的なこととはいえ、ボーイスカウトの制服はシークの5Kの掟を脅かすものでもあり、²³⁾ 若者たちの信仰ばなれに繋がりがねなかつた。学校教師ハカム・チャンド (Hukam Chand) も「この汚いイギリス人たちを見る。奴らはハンカチを取り出して鼻をかみ、それにつばを吐き、そのバイ菌の付いたぼろ布をポケットにしまうんだぞ」(202) と述べるほど西洋嫌いで、ボーイスカウト活動が盛んになれば洋装で登校する生徒を叩くこともできず、威信が失われることを恐れた。つまりところ、村の有力者たちは虚飾に満ちた謁見式で農業改革に取り組むロングを褒めたたえても、村に西洋の様式や思想が持ち込まれることは歓迎できなかつた。

ラーがボーイスカウトへ入団するにあたって5Kに拘らなかつたのは、それが元祖のグル・ナーナク (Guru Nanak, 1469～1539年) の教えとは無縁であり、村の長老たちが固執するねじ曲げられたシークの慣習に意味を見出せなかつたからである。西洋文明にあこがれていた彼は、靴を履いて洋服を着るボーイスカウトの身支度を好んだ。体育ばかりでなく少年たちの宗教を超えた協調性、自立心や好奇心を養うというボーイスカウト活動の目標も彼の肌に合うものであつた。なるほど彼の精神的指導者たるべきは家族が貢ぎ物を捧げるマハントのナンドギルのはずである。しかしシークの聖職者であるにも関わらず、ナンドギルは「黄色のシルクを纏ってぜいたくな食事を食べ、キャラ (ハシーシュの一種) や大麻を吸う」(67) ばかりではなく、「肉体的欲求を昇華するために、一番美しい女弟子に体のマッサージをさせ」、「売春婦を囲っていると噂される」好色男だつた。土地を騙し取つたハーバン・シンを罵るニハールに対して、カースト制度を擁護して説教するようなナンドギルが、ラーの目に「ペテン師」と映るのも当然である：

寺院に土地を捧げてしまった小農は聖職者の我々を非難する。あんたのような人が大地主に憤ると同様に、神がこの世の人間たちにそれぞれ一つの地位を与えたことについて議論を挟む余地はない。農奴にあんたのような品格がないことは分かるだろう。だから自分の品格を守って、他の人間の地位に自分を置こうとしないように。それは罪になるから。あんたより優れた人を妬まないのが真実の宗教だ。なぜならそんなことをしたら世の中に秩序がなくなるからだ。それにあんたが自分の敵を

22) マハント (Mahant) はシーク教徒のグルドワラー (礼拝所) を管理する聖職者である。パンジャブがイギリス人に支配されるようになって、当局に保護されたマハントたちが、ナンドギルのように献金や所有地を乱用するような世俗化した権力者になった経緯については、クシワント・シン著、斎藤昭俊訳、『インドのシク教』(国書刊行会、1980年) 122-29頁参照。

23) 5Kとは五つのシンボル、Kesh (髪) の毛、Kangra (木製の櫛)、Kara (鋼鉄製の腕輪)、Kirpan (短剣)、Kacha (ズボン) のことで、これらを身に着け髪を切らないことがシークの掟とされる。しかしそれは第10代グル・ゴビンド・シン (Gobind Singh, 1666-1708年) が定めたもので元祖ナーナクの教えに基づくものではない。N.G. コワル・シング、前掲書、62-68頁参照。

罵れば、自分の家を穢すことになりかねない。聖職者の家で罵言を吐くのを慎むように。 (64)

ナンドギルが「神」を持ち出してニハールの怒りを沈めようとするのは、彼が小農を搾取るハーバン・シンの同盟者に他ならないからである。しかしそれが認識できないニハールは、訴訟を取り下げを拒否する一方で、最後は「神の審判」に期待するためか、不作であろうと借金に苦しもうと、毎年ナンドギルに貢ぎ物を提供し続ける。ラーラーにとってそれは、はなはだ不条理に思われた。村人の中には彼を「あの犬」と呼ぶ者もあるというのに、「なぜ自分の家族には、こんなペテン師たちへの贈り物に無駄遣いするのをやめる分別がないのか」(67) 不思議だった。

ナンドギルが「シーク社会の導師」であることに反感を抱くラーラーには、シーク教徒の宗教的戒律を守るのも無意味に思えた。彼が祭りを見物したマナバードの町でイスラム教徒の店で買ったカレーを食べたのは、²⁴⁾ 単に空腹であったためばかりではなく、「ペテン師」を仰ぐシーク教徒の慣習にあえて挑戦しようという気持ちからでもあった。イスラムの店主からは横目でにらまれ、隣に屋台を構えるヒンドゥー商人から「お客さん、イスラム教徒の店で食べていることが自覚できなくなってしまったのかね。多分、12時の鐘が鳴って、分別も消えたんだな。この暑い時間に、頭に重い髪の毛の荷物を乗せてるんじゃないか、考えることもできないだろうね」(114) と軽蔑され、彼は二人の目前で食事をする勇気を失った。しかしイスラム教徒が屠殺した動物の肉を食べること自体には抵抗を感じなかった。「重い髪の毛の荷物」も、それが農作業等に邪魔になったばかりではなく、ミッション・スクールの学芸会で少女役に利用されたことが腹立たしい思い出となった故に、神聖視できなかった。そのため町の床屋に寄って断髪してもらおうのが、彼の幼い頃からの夢であった。確かに長い髪の毛を切った「結果」については多少の不安もあったが、髪の毛を切らないという戒律はグル・ナーナクが定めたものではなく、グル・ゴビンド時代のシーク教徒の武装化によって生まれたものであり、信仰そのものとは無縁であるというのが彼の見解であった：

「僕は祭りの市を見物するために町へ行ったら、この伸びすぎて纏れた髪の毛の山を切ってもらう」と苛立つ気持ちを募らせて彼は言った。この長髪の毛の信仰については儀礼にすぎない。ケーシュ、カンガー、カラー、キルバーン、カッチャーはグル・ゴビンド・シンがオーランゼーブ皇帝と戦った時代には必要だったかもしれない。それにゴビンドが衣服を買えない自分の臣下にショーツをはき、シンボル用に腕輪と刀を買うように、髪の毛を剃る床屋がないので長い髪をそのままにして櫛でとくように命令したと言われる。そのような身支度は常識と必要性から命じられたものだ。しかし少しでも知性のある者は誰でも言う。「もう必要ではないのに、これらの慣習を守る必要があるのか」と。彼はいつも長い髪をしていることに苛立ちと困惑を感じた。他の4Kについては気にならなかった。それらは不必要で迷信的だったが実質的に不便を感じるものではなかった。 (44-45)

長髪の問題に関しては、実際に1920年代には若いシーク教徒の間にラーラーと同様、それを時代錯誤と考へて断髪を望む声もあったと言われる。²⁵⁾ しかし、『村』がシーク教を冒瀆

24) シーク教徒は、動物を死に至らしめるまでに時間がかかって苦しめるという理由で、イスラム教徒が屠殺した肉を食べることを禁じられている。クシワント・シン、前掲書、23頁参照。

25) クシワント・シン、前掲書、221頁参照。

する作品としてパンジャブ州で禁書にされたことや、²⁶⁾ 第一次世界大戦に参加したシーク教徒がヘルメットをかぶらず、ターバンを巻いたまま参戦したのも周知の事実である。ならば、マナバードの町の床屋で髪の毛を切って村に帰った彼が、異端児として保守的なシーク教徒から迫害されるのも当然の成り行きであろうか。ハーナム・シンの妻アジット・カウル (Ajit Kaur) の「体毛を一本でも剃ることは最も恥ずべき恥辱だ… シークの5K信仰に対する最も忌まわしい冒瀆である」(131-32) という見解は、ラルーの家族にもシークの保守的な隣人たちにも共通するものであった。我が子であるにもかかわらず、ニハールは「老いたライオンが怒り狂うように」断髪したラルーに飛び掛ってその首に爪を立てた。そして二男ダヤール・シン (Dayal Singh) とその仲人ラムジ・ダス (ヒンドゥー教徒) が止めるにも関わらず、「お前は穢れた犬、豚だ」、「お前はわしと一族を辱めた。わしの名声を台無しにし、先祖の名誉を傷つけた」(130) と叫んで長男シャーム・シン (Sharm Singh) と共に彼の体中を殴りつける。それだけでもラルーはひどいショックを受け後悔の念さえ覚えるが、騒ぎを聞きつけた大地主の息子ハーディット・シン (Hardit Singh) とシーク寺院の聖職者アルジャン・シン (Arjan Singh) によって、顔を黒く塗られた後にロバの背にくくり付けられ、村中にその姿を晒す羽目に陥る。そのために彼は「生まれてこなければよかった… どこか他の所で生まれればよかったのに」(138) と思うほど厭世観にかられるが、その屈辱きわまりない仕打ちに対して家族やアジット・カウルが怒って自分をかばったために気を取りなす。イスラムやヒンドゥーの友達たちは勿論、ハーディット・シンの妹のマヤ (Maya) さえ断髪した彼と相変わらず付き合い続けたことも慰めとなった。そのため、しばらくラルーは波風をたてることなく父や長兄の言いつけを守って暮らす。ところが彼が娘のマヤ (Maya) と体が触れるほど親しく遊んでいるところを目撃したハーバン・シンは、二人の仲が発展するのを恐れて、²⁷⁾ ラルーに泥棒の濡れ衣を着せ、その身柄を官憲の手に引き渡そうとする。警察が有力者に組することを認識していた彼は、難を逃れるためにマナバードへ逃亡し英印軍の兵士の募集に応じてセポイになる。それを知ったハーバン・シンは軍隊に入ったラルーがイギリス将校からその能力や人格を買われ、犯罪者として追放されないことを予想して泥棒事件の訴えを取り下げる。

ハーバン・シンが恐れたように、ラルーの無実の訴えはロングの知人であったイギリス人副官オーエン大尉に信用され、彼は身体検査の場に現れた官憲に引き渡されることなく入隊を認められる。彼が断髪しているためにヒンドゥー教徒と偽ってドグラ連隊に配属された規律違反も、オーエン大尉の配慮として不問にされる。めでたくセポイとなった彼は軍事教練で軍曹ロック・ナス (Lok Nath) から目の敵にされて何度も殴られるが、英語の読み書きやホッケーが得意なために「際立った」セポイとしてイギリス人将校や歩兵軍曹 (Havildar) ラチマン・シン (Lachman Singh) たちから目をかけられ一人前の兵士として育っていく。それでニハール家は何とか体裁を繕い、ラルー自身の運命も切り開けそうなものだった。に

26) George, *op. cit.*, 82 参照。

27) ラルーはセポイとして第一次大戦後、ドイツの捕虜収容所から解放されて帰国した後、寡婦であったマヤと駆け落ちして、内縁の妻にする。Anand, *The Sword and the Sickle* (London: Jonathan Cape, 1942) 参照。

もかかわらずニハール家が名実ともに滅びてしまうのは、祭りの酒の勢いでハーディット・シンがシャーム・シンの妻ケサリ (Kesari) を凌辱した事件が発端であった。

一家の名誉を汚す破廉恥極まりない行為に対して激怒したシャーム・シンが、ハーディット・シンを殺害するのは宗教的にも法律的にも情状酌量されるべき犯罪であった。しかし婦女暴行の現場にいたにもかかわらず、ナンドギルは自分やハーディット・シンの父親であるハーバン・シンの名誉のために「ケサリはその場にいなかった」(275)と裁判で偽証し、シャーム・シンは絞首台に送られてしまう。ニハールは長男や一家の面目を失うばかりでなく、弁護士費用を捻出するために3エーカーの土地を手放し、破産に追い込まれる。そのために莫大な費用をかけて婚約を披露した次男ダヤール・シンの結婚話も破談となり、孫の顔を見たいというニハールの望みはかなえられなくなる。ケサリは実家に戻り、ダヤール・シンは出家の道を選ぶ。災難が続いてニハールは病の床に伏してしまうが、セポイになったラルーとの再会を喜び、彼に遺言を託して励まし戦場に送り出す。後ろ髪を引かれる思いに駆られながら、村を後にしたラルーは、まもなくヨーロッパ戦線に参戦するために、カラチからマルセイユ行の船に乗り込んだところで父親の訃報を知らされる。

V

シーク教徒が長髪をターバンで巻く慣習は、可視的にシーク教徒を異教徒から区別する重要なものであり、それをなるべく守ることが信徒に勧められているという。²⁸⁾ 髪を切らない慣習は非シーク教徒のアーナンドには合理性を欠くように思われたようだが、『村』を読む限り、問題として提起されているのは5Kの是非ではなく、グル・ナーナクの教えとは無縁の儀礼や儀式、信仰のあり方であると言えよう。母親の実家との付き合いによってそれらの問題を認識していたアーナンドは、²⁹⁾ あえてシーク教徒の親族の怒りを買うような物語を執筆したのであろう。実在のアーナンドの祖父や叔父が5Kや宗教的儀礼に固執する一方で大麻を好んだかは知るよしもないが、もしそうであるとするなら作者は彼らの信仰に矛盾を感じたに違いない。実在の叔父をモデルにしたダヤール・シンの婚約者が「彼の頭や顔に毛髪がないほうがよかった」(131)という話にも作者の皮肉が込められているように感じられるが、³⁰⁾ その婚約で問題にされているのは髪型ではなく、ハーバン・シンまで招待する虚栄に満ちた披露宴であるように思われる。

28) ランジート・アローラ著、河津千代訳『シーク教の人びと』(リブリオ出版、1983年) 25-26頁参照。

29) アーナンドの母親は、シークの家庭で育ったが、イスラムのイシュマイリ派アーガー・ハーン三世やヒンドゥーのカーリ神、イエス・キリスト等も崇拝した。彼女はアーナンドが幼い頃、弟の婚礼のために里帰りしたものの、信仰の違いではなく経済的格差を実の母親や妹から妬まれて実家にいられなくなり結婚式に出席しなかった。彼女に同行したアーナンドは、その思い出によって当時のシーク社会の世俗的な現実に関心したと思われる。また、彼がシーク教徒の慣習を否定的に描くことに関しては、彼の通ったカルーサ・カレッジがシークの宗教改革を求めるアーカーリー (Akali) 運度の発祥地であることも注目すべきである。ビパン・チャンドラ著、栗屋利江訳『近代インドの歴史』(山川出版社、2001年) 230頁参照。

30) 実在の母方の叔父ダヤール・シンは、ヒンドゥー教徒ではなくグルドワラーを管理する聖職者の娘と結婚した。Anand, *Pitpali Sahab*, 191 参照。

また異端児となったはずのラーラーがセポイとなって帰郷すれば、村人が手のひらを返すように彼を英雄として歓迎し、出兵する際はこぞって見送るという場面も、感動的ではあるが、いささか滑稽で矛盾した印象を否めない。さらにニハールが「お前の敵と戦え、真実を偽る敵と戦ってお前の先祖の名声を保ち続けろ。死を目前にしても我々が臆病者だと呼ばれるようなことはするな」(310)とラーラーに遺言するのは、一家の尚武の伝統を三男の彼が体現するように望んだ故で、それなりに理解できる。しかし、ニハールが土地を取り返す戦いをラーラーに託したことを想起すれば、「真実を偽る敵」とは、ドイツ兵ではなく、ハーバン・シンやナンドギルではないのか。第一次大戦時にイギリス軍に協力することが祖国を守ることになるとはいえ、ラーラーが「毛唐の奴隷」とも呼ばれるセポイになったことをニハールが誇るのも論理的に矛盾している。そもそもラーラーが兵士になったのは、故郷に錦をかざるためではなく、冤罪からの避難場所を求めてのことである。ニハールからシーク戦争の話を聞かされていた彼には、セポイを募集する歩兵軍曹レーナ・シン (Lehna Singh) の話が眉唾ものではないかという疑念もあった。しかしレーナ・シンの呼びかけは、半信半疑でも急場をしのぎたいラーラーにとっては魅力的に感じられたのである：

イギリス国王は全印度軍の大佐だ。国王は時々ターバンを巻かれてご自分も我々と同胞であることを見せて下さる… 軍人になれば平和な時には月11ルピーももらえる。戦争になったら勲章や栄誉が手に入るし、海外遠征手当がついて給料が上がり、故郷の村へ送金もできる… おまけに見たことのない国も見られる… お前さんたち田舎者の役立たずのごろつきがそれ以上、何を望むんだ。軍隊の兵隊の階級を与えられ敵に突撃する以上に何が望めるんだ…

政府はお前たちに運河を与えた。イギリスの旦那たちが鉄道や道路を作ってくれた。政府はお前たちにいい給料をくれるし、お前たちが勇敢な先祖の輝かし伝統を保つように勧めている。さあ来い、来い。戦士の子孫ラージプート族よ、勇敢なシークの獅子たちよ、マホメットの子孫たちよ、祖国と大英帝国の国王を守るために、イギリスの旦那と並んで戦え。(231-32)

レーナ・シンに誘われてラーラーがセポイになり、第一次大戦に参戦するという物語の顛末は、シーク教徒の14人に1人が出征したという歴史的事実を考慮すると、³¹⁾ もっともらしい結末であるとも言える。ラーラーと同様、彼らの多くは「月11ルピー」の給料や「故郷の村へ送金」が目的で入隊し、いかなる敵とどこで戦うのか検討もつかなかった。耕作地を失い破産したパンジャブのシーク農民にとって、軍隊に入ることは乞食になることを免れる道でもあった。³²⁾ 実際にイギリス将校の盾になって戦ったシーク教徒の中には「輝かしい先祖の伝統」を誇示し、勲章を授けられたり、故郷に土地を与えられた者もあった。³³⁾ ならば彼らにとって「イギリスの旦那」は有り難い存在だったかもしれない。しかし、ラーラーは入隊後、上記の宣伝文句が欺瞞に満ちたもので、給料からは必要経費を差し引かれ、勲章はもらってもそれが命と引き換えである現実と直面する。³⁴⁾ それはまだしもドイツ兵と勇敢に

31) クシワント・シン前掲書135頁参照。

32) ダーリングは貧窮したパンジャブの小農が入隊することを肯定的に捉えている。Darling, *Wisdom and Waste in the Punjab Village* (London: Oxford UP, 1934) 23-24, 75, 321 参照。

33) 帝国政府が第一次大戦に参戦したインド人に耕作地を与える約束をしたことについては、Imram Ali, *The Punjab under Imperialism, 1885-1947* (Princeton: Princeton UP, 1988) 109-26参照。

34) 『黒い海を渡って』の中で、ラチマン・シンは戦死した後、勲章を与えられる。Anand, *Across the Black Water*, 200-205参照。

戦ったにもかかわらず、彼は長い捕虜生活を送ったためにスパイ容疑をかけられ、終戦後に政府から耕作地をもらえず、故郷に錦をかざる夢を砕かれる。気がひけながらも故郷に帰れば、母親は災難続きの苦労が祟って既にこの世を去り、家族が所有していた家にはハーバン・シンが住んでいた。彼の家族のみならずほとんどの小農や労働者が破産して、村にはナショナリズムの嵐が吹き荒れている有様であった。³⁵⁾ イギリス支配者は、かつてルールを迷妄の世界から目覚めさせ、原始的な村に文明の風を吹き込もうとしてくれたが、同時に古き良き伝統が残っていた村落共同体を破壊してしまった。寄る辺のなくなったルールは、自分にとって「真実を偽る敵」とは、ハーバン・シンのような輩を帝国主義の一つの歯車として動かすイギリス支配者であることを悟り、ナショナリズムに傾倒していく。

つづく

【参考文献】

- Ali, Imran. *The Punjab under Imperialism, 1885–1947* (Princeton: Princeton UP, 1988)
- Anand, Mulk Raj. *Pilpali Sahab: A Story of Childhood under the Raj <Autobiography>; Part 1 >* (New Delhi: Arnold-Heinemann, 1968)
- Anand, Mulk Raj. *Confessions of a Lover* (London: Arnold-Heinemann, 1976)
- Anand, Mulk Raj. *Letter on India* (London: George Routledge & Sons, 1942)
- Anand, Mulk Raj. *Morning Face* (London: Arnold-Heinemann, 1968)
- Anand, Mulk Raj. *Seven Summers: A Memoir* (New Delhi: Penguin, 2005)
- Anand, Mulk Raj. *The Sword and the Sickle* (London: Jonathan Cape, 1942)
- Anand, Mulk Raj. *The Bubble* (London: Arnold-Heinemann, 1984)
- Anand, Mulk Raj. *The Village* (London: Jonathan Cape, 1939)
- Arora, Neena. *The Novels of Mulk Raj Anand: A Study of His Hero* (New Delhi: Atlantic, 2005)
- Beauchamp, Joan. *British Imperialism in India: Prepared for the Labour Research Department* (London: Martin Lawrence, 1934)
- Calvert, H. *The Wealth and Welfare of the Punjab: Being Some Studies in Punjab Economics* (Lahore: The Civil and Military Gazette, 1922)
- Calvert, H. *The Wealth and Welfare of the Punjab*, 2nd (revised) ed. (Lahore: The Civil and Military Gazette, 1936)
- Darling, M.L. *The Punjab Peasant in Prosperity and Debt*, (London: Oxford UP, 1925)
- Darling, M.L. *Wisdom and Waste in the Punjab Village* (London: Oxford UP, 1934)
- Gautam, G.L. *Mulk Raj Anand's Critique of Religious Fundamentalism: A Critical Assessment of His Novels* (Delhi: Kanti Publications, 1996)
- George, C.L. *Mulk Raj Anand: His Art and Concerns* (New Delhi: Atlantic, 2000)
- Lunt, James ed. translated and first published by Lieutenant-Colonel Norgate, Bengal Staff Corps at Lahore, 1873; illustrated by Frank Wilson. *From Sepoy to Subedar: Being the Life and Adventures of Subedar Sita Ram, a Native Officer of the Bengal Army Written and Related by Himself* (London: Routledge, 1970)
- Rajan, P.K. *Studies in Mulk Raj Anand* (Abhinav Publications, 1986)
- Rajan, P.K. "Author as Hero: A Study of *Morning Face*" in *The Novels of Mulk Raj Anand*, ed. Dhawan, R.K. (New Delhi: Prestige Books, 1992)

35) Anand, *The Sword and the Sickle*, 15–25参照。

- Singh, Amrik. *Mulk Raj Anand: Role and Achievement* (New Delhi: National Book Trust, 2008)
- Sinha, Krishna Nandan. *Mulk Raj Anand* (New York: Twayne, 1972)
- アナンド, M.R. 著, 山際素男訳『不可触民バクハの一日』(三一書房, 1984年)
- アナンド, マルク・ラジ著, 中村保男訳『苦力』(新潮社, 1957年)
- アローラ, ランジット著, 河津千代訳『シーク教の人びと』<シリーズ 世界の宗教3> (リブリオ出版, 1995年)
- 上田和夫 [他] 編『20世紀英語文学辞典』(研究社, 2005年)
- シン, クシワント著, 斎藤昭俊訳『インドのシク教』(国書刊行会, 1980年)
- シング, N.G.コウル著, 高橋亮英訳『シク教』(青土社, 1994年)
- 『世界文学事典』編集委員会編『集英社世界文学事典』(集英社, 2002年)
- チャンドラ, ビパン著, 粟屋利江訳『近代インドの歴史』(山川出版社, 2001年)
- 長谷安朗著「シク社会における不可触民」, 佐藤正哲, 山崎元一編『歴史・思想・構造』<叢書 カースト制度と被差別民 第一巻> (明石書店, 1994年)
- マルクス, カール; フリードリッヒ・エンゲルス著, 大内兵衛 [他] 訳『マルクス・エンゲルス全集』第9巻 (大月書店, 1962年)

